

# 英語談話標識と翻訳

English Discourse Markers and Translation

松尾 文子\*

Fumiko Matsuo

キーワード：談話標識、翻訳、等価

Key words : discourse markers, translation, equivalence

## 要旨

本稿では、主に談話標識が多用される小説の会話を題材に、談話標識の視点から翻訳を考える。

翻訳では、起点テキストの情報内容のみならず話し手の発話意図も適切に伝えなければならない。談話標識は実際に用いられた文脈との関連で意味機能が決まる。この意味機能は話し手の発話意図を示すことであり、談話標識は話し手の発話意図を適切に伝える手がかりとなる。

言語構造の異なる二言語同士を全く同じ意味 (identical) で翻訳するのは不可能で、等価な (equivalent) 表現を選ぶことになる。「等価」は翻訳理論の中心的概念で、複数のレベルがある。翻訳では起点テキストと目標テキストの機能は可能な限り一致しているのが望ましく、これは語用論的に等価な表現を用いることによってある程度達成でき、談話標識はこれに貢献できる。起点言語の談話標識すべてを目標言語に置き換えることは不可能であるが、小説の会話部分で用いられる談話標識の機能を理解することで、登場人物のやり取りの機微を捉えることは可能であると考えられる。

---

\* 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

## I. はじめに

翻訳研究のフィールドは広い。たとえば、カルチュラルスタディーズ、社会学的アプローチ、ITの発達之恩恵を受ける機械翻訳やコーパス利用など、外国語教育での応用、グローバル化との関連分野、英語が国際語となっている状況で、情報格差をなくしてどの言語話者にも利用する権利があるとする開発ローカリゼーションとの関連（ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:124)<sup>1)</sup> などである。本稿では、II. で述べるように語用論的な要素である談話標識を取り上げるので、言語学的、特に語用論的研究に特化する。

本稿では、論文からの例文以外の実例は、小説の会話部分の翻訳を対象にする。翻訳を実践しつつ、翻訳について考える。

本稿の構成は以下のとおりである。II. では、談話標識とは何かを述べる。III. では談話標識を翻訳という視点から考える際に重要な事柄を、IV. では翻訳の題材に関して述べる。V. では、翻訳とはどのような作業なのかを考える。VI. では翻訳の2つのタイプを、VII. では翻訳研究の中心的な概念である「等価」を説明し、VIII. では等価のレベル・タイプを示す。IX. では談話標識をどのように翻訳するか、例を挙げて論じる。X. では、本稿で分析の対象とする小説の会話部分で用いられる談話標識の翻訳の実例を踏まえて、翻訳とは何かを述べる。

## II. 談話標識とは

「談話標識」とは、話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ〔命題内容〕の周辺に位置し、聞き手がその内容を正しく理解するように意味解釈の仕方を合図する標識である。そして、その意味解釈の仕方を合図するにあたり、文脈に応じて、話し手の態度表明・感情表出、情報価値、談話構造、対人関係等に聞き手の意識を向けさせる表現である（廣瀬・松尾・西川 2022:19)<sup>2)</sup>（下線部は本稿著者による）。談話標識は固定された意味や機能を安定的に保持しているというより、実際に用いられた文脈との関係で意味機能が決まる。「意味解釈の仕方を合図する」とは話し手の発話意図を示すことであり、談話標識は話し手の意図を適切に翻訳する手がかりとなる。談話標識の主な談話上の役割とそれぞれに含まれる言語表現は下記のとおりである（注1）。なお、談話標識は書き言葉でも用いられ、その場合は話し言葉における話し手は書き手に、聞き手は読み手になる。本稿では、話し言葉の例を扱う。

- (1)話し手の態度表明・感情表出：frankly, honestly, kind of, of course, to tell (you) the truth, etc.
- (2)情報価値：ah, oh, OK (okay), well, you know, you see, etc.
- (3)談話構造：after all, and, but, so, on the other hand, etc.
- (4)対人関係：if you like, kind of, like, well, etc.

## III. 談話標識と翻訳

この章では、談話標識を翻訳という視点から考える際に重要な事柄を述べる。まず、談話における談話標識の必要性に関して、Fraser (2010) および Brinton (1996; 2010:286)<sup>3)4)5)</sup>で以下のように述べられている。

- (1) 談話標識は語用論的に見ると選択的でも不必要でもなく、談話標識がないとその談話を理解するのは容易ではない。
- (2) 談話標識がなければその談話は文法的に容認可能でも、伝達上の文脈からすると「不自然」「ごちない」「支離滅裂」「無作法」「ぶしつけ」「独善的」と判断される。さらに、伝達がうまくいかない恐れが大きくなる。

談話標識の翻訳に関しては、Johansson (2006:131)<sup>6)</sup> で以下のように述べられている。

- (1) 談話標識はいわゆる意味内容に欠けるので、異なる言語間での解釈には困難を伴い、翻訳も難しい。
- (2) 談話標識を翻訳するには文脈的意味を考える必要があり、目標言語でそれに応じた適切で自然な訳をすることが困難である。
- (3) 談話標識は discourse-bound で多機能なので、原言語の談話標識のさまざまなニュアンスと全ての機能を目指言語で保持することはありそうにない。さらに、翻訳者の個人的スタイルや好みも影響する。

文脈の重要性と文脈の解釈の困難さに関して、Aijmer & Simon-Vandenberg (2006)<sup>7)</sup> では翻訳コーパスの有用性と欠点が提示されている。翻訳コーパスを用いれば、言語 A の要素が言語 B でどのように表されるかの枠組みや意味の類似性、違い、重複が分かる。また、当該の談話標識が用いられる文脈を発見できる。翻訳するには、文脈的な要因を解明することが必要なので、コーパスは有用である。欠点としては、翻訳は訳者個々に影響されることがある。

翻訳は基本的には異なる言語の間で行われるが、談話標識の言語間での違いについて、歴史語用論の知見から分かることがある。談話標識の多くが(間)主観化((inter)subjectification)と関わる事が明らかになっているが、(間)主観化の表し方は言語によって異なり、文化的・社会的規範に適った表現形式を取るとされる。主観化とは、もともと単に客観的な意味を示していた語が、話し手自身の主観的判断・観点・意味を表すようになる意味の発達をいう。間主観化とは、主観化を基盤にして、コミュニケーションの中で用いられる機能・意味を帯びて行く変遷をいう。間主観化をどのように言語化するかは、社会的・文化的な規範によって異なるとされる (cf. Onodera 1995, 2000, 2007:240; Traugott 2003; López-Couso 2010)<sup>8)~12)</sup>。

以上のように、談話標識の翻訳にはさまざまな困難な点がある。

#### IV. どのような題材を翻訳するのか

何を翻訳するか、題材のジャンルによって用いられる言語表現の特徴が異なり、翻訳の目的や重視される要素も異なる。例を挙げる。

マニュアル、法律、規則などの実用文では、情報を正確に伝えることが目的となる。文学では、伝えられる情報も重要だが、情報の表現の仕方も重要である。山本 (2020:87-88)<sup>13)</sup> によると、文学は「文体そのものに意味があり、形そのものがテキストの意味や価値と不可分」である。韻文では特に、韻律や詩の形式が価値を持つ。文学でも戯曲では、「上演可能性という条件を満たすために、舞台設定、時代、雰囲気重視され、文化差が調整される」(ペイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:233)<sup>1)</sup>。

視覚情報を伴うジャンルではどうだろうか。漫画では「絵と文字の相互作用が生まれる。セリフなどの字体や絵の色、オノマトペの使用などで情報が伝えられる」(ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:42-43)<sup>1)</sup>。映画の字幕では、映像のほかに、セリフや効果音といった音声情報も伴い、「語用論的側面が重視されて個々の語の意味より意図や効果を伝えることが求められる」(ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:231-232)<sup>1)</sup>。字幕はスクリーンに映し出されるが、翻訳したセリフを載せるスペースが限られており、次々と変わる場面に対応しなければならないので、翻訳の表現は簡潔でなければならない。

近年研究が進みつつある広告翻訳だが、広告は消費者を引き付けて購買行動などを起こさせることが目的である。翻訳する場合、「言語を置き換えるだけでは広告として機能しないため、テキスト全体を創り直すことも起こりえる。言葉遊びを含む言語の側面、画像との関係、文化との関係も考慮する必要がある」(ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:10)<sup>1)</sup>。

翻訳の題材となるジャンルはさまざまあるが、本稿では、談話標識が多用される主に小説の会話部分を対象にする。

## V. 翻訳とは

以下、起点テキスト(原文のこと)を ST [source text]、そこで用いられる起点言語を SL [source language]、目標テキスト(訳文のこと)を TT [target text]、そこで用いられる目標言語を TL [target language] と記す。

構造言語学者の Roman Jakobson は、論文 'On Linguistic Aspects of Translation' (1959) で、翻訳には 3 種類あるとした(注 2)。House (2009: 4, 117)<sup>14)</sup> による定義が分かりやすいので、以下に記す。

- (1) 言語内翻訳 (intralingual translation) : 同一言語内で、異なるスタイルのレベルに翻訳すること。たとえば Old English のテキストを Modern English のテキストに翻訳する。
- (2) 言語間翻訳 (interlingual translation) : ある言語を別の言語に翻訳すること (注 3)。
- (3) 記号法間翻訳 (intersemiotic translation) : ある言語を別の非言語的表現 (たとえば音楽や踊り、絵) に翻訳すること。

このうち、本稿では(2)を対象にする。

翻訳とは、書かれたものに関して構文などを文法的に正しく捉えて、元の語句を辞書に載っていることばで置き換えるだけものではない。ことばによって伝えられるのは、情報とことばの使い手、すなわち話し手や書き手の意図である。翻訳は言語による伝達行為であり、すでに存在する SL のテキストを TL のテキストに置き換える二次的伝達行為である。ST を TT に置き換える翻訳経路を図示すると、以下のようになる。

## 〈翻訳の経路〉

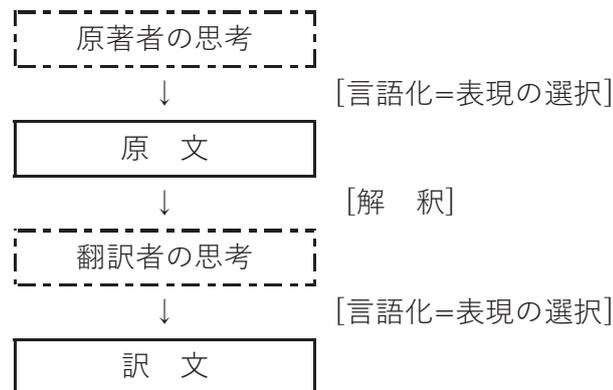


図 1

原著者には伝えたい思考があり、使う表現を選択して言語化することで原文ができる。その原文を解釈した翻訳者の思考を、使う表現を選択して言語化することで訳文ができる。翻訳者は原文を解釈する役割だけではなく、訳文にする際にどのような表現を使うかを決める役割も担う。Ⅲ. で翻訳コーパス利用に関して述べたように、どのように翻訳するかは訳者個々に影響されることがある。このことは翻訳の宿命である。

本稿で対象にする小説の会話を翻訳する際に、特に何が重視されるのか。翻訳によって伝えられるのは、ST の情報内容と伝達効果である。伝達効果は、後述する語用論的に等価なテキストに置き換えることである程度達成される。深刻なコミュニケーションの破綻は、単なる言語表現の誤解よりも発話行為の取り違いによって起こりやすいという(ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:158)<sup>1)</sup>。たとえば、話し手が語や文を発することでどんな行為一言明、断定、質問、約束、命令、要求などを遂行しているかが聞き手に正確に理解されなければ、話し手の発話意図も正確に伝わらず、伝達効果が適切に達成されないことになる。また、Ⅸ. の事例で述べるように、談話標識によって話し手のさまざまな発話意図が示される。話し手の発話意図は、その発話で用いられる語句や形式だけで決まるのではない。言語使用の場面、すなわち文脈との関連で理解すべきである。

## VI. 2つのタイプの翻訳

後述する「等価」への関心から、翻訳は以下の二項対立で語られることがある。Julian House はドイツ語と英語を対照分析し、翻訳評価のための語用論に基づいたモデルを提唱した。ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 (2013:177)<sup>1)</sup> によると、このモデルでは ST と TT の言語状況的特性を分析し、それを比較して対応関係が査定される。このモデルにおける等価関係は、M. A. K. Halliday の観念形成的機能と对人的機能から成る機能の等価で、その機能を達成するために用いられる語用論的手段も等価でなければならないとする。

### VI- 1. 潜在的翻訳 (covert translation)

暗示的な翻訳。文化フィルター (cultural filter) を使うことによって、翻訳されたテキストがターゲットとなる文化においてオリジナルであるかのように見せるタイプの翻訳である。文

化フィルターとは、SL と TL のコミュニティにおける文化的な相違を確定して取り除く手段のことである (House 2009:116)<sup>14)</sup>。文化的な相違とは、異文化要因のことをいう。マンデイ / 鳥飼 (2018:145)<sup>15)</sup> は、House の名づけた「文化的フィルター」を翻訳者が適用し、文化的要素を修正して、TT があたかも原著であるかのような印象を与えるとする。

このタイプの翻訳は、ST が SL 文化固有のものでない場合に求められ、機能的等価は潜在的翻訳においてのみ可能となる。潜在的翻訳は顕在的翻訳よりも難しい。というのは、ST と TT の言語共同体では文化的前提が異なるため、翻訳は文化フィルターを適用しなければならないからである (ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:178)<sup>1)</sup>。

## VI- 2. 顕在的翻訳 (overt translation)

明示的な翻訳。オリジナルのテキストの文化的特徴が意図的に保たれているタイプの翻訳 (House 2009:116)<sup>14)</sup> で、翻訳テキストの受け手に対して直接に向けられたものでないことが、かなり「あからさま」な翻訳である (マンデイ / 鳥飼 2018:144)<sup>15)</sup> (注 4)。

このタイプの翻訳は、ST が起点文化に強く依存していて切り離せないような場合に求められる (ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:178)<sup>1)</sup>。文化フィルターを考慮する必要がないという点で、一般的に困難さを軽減できる (House 2006:349)<sup>14)</sup>。

ただ、ここまで論を進めてきて気づくのは、異なりの度合いが大きい言語間での翻訳を考えることの難しさである。このことは、以下のように他の著書でも指摘されている。

- (1) 翻訳研究は欧米で展開されてきた学問であるため、欧米語間の翻訳を想定した理論の多くはそのまま日本語に当てはめることは難しい (ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:87)<sup>1)</sup>。
- (2) 本章で考察してきた翻訳理論家 (本稿著者注: Baker や House など) が提唱する分析は、英語中心の枠組みである。このことは英語以外の言語を扱う場合、特に主題構造や情報構造の分析では、問題となる (マンデイ / 鳥飼 2018:156)<sup>15)</sup>。
- (3) 読者の中には、西洋の翻訳理論に基づいた本書の議論が日本語のコンテキストでも適用できるのかと疑問を呈する向きもあるかもしれない (ピム / 武田 2020:278)<sup>16)</sup>。

談話標識は潜在的翻訳の範疇に入るのであろう。しかし、翻訳の質を評価するために作られた House のモデルに関して、マンデイ / 鳥飼 (2018:145)<sup>15)</sup> では、House が苦心して指摘しようとしているのは、「顕在化」と「潜在化」翻訳の区別が二項対立ペアではなく、漸次的連続体 (cline) であるということだとする。

## VII. 等価 (equivalence)

言語構造の異なる二言語同士を全く同じ意味で翻訳することは不可能であるが、翻訳では ST と TT の間に全く関係がないことはありえず、何らかの点で「等価 (equivalence)」性を持つ。

ST と TT の間には形式、機能、あるいはその他のレベルで等価の関係性があるという考え方は、等価といっても言語そのものが同じということではなく、何らかのレベルで価値が同じでありうるということである。こうした前提を共有する多くの理論は、広義での「等価パラダイム」に属すると捉えられる (ピム / 武田 2020:11)<sup>16)</sup>。ST と TT は、Panou (2013:2)<sup>17)</sup> の言葉を借りれば、identical ではなく equivalent で、完璧な等価はなく、相対的である。

Koller (1995:196)<sup>18)</sup>によると、記述的な翻訳研究におけるいかなる言語テクスト的アプローチであっても、翻訳は double linkageという特徴を持つという基本的な考え方に立つ。すなわち、第一に、ST とのつながり、第二に受け手側の communicative conditions とのつながりであり、この double linkage は等価関係を定義する際に中心的な要素となる。Koller の等価の分類に関しては、VIII-2. で述べる。

このように、翻訳研究では「等価」という用語で議論が展開されてきた。等価は翻訳理論の中心的概念であるが、等価概念をどのように扱うかについては立場が大きく分かれている（ベイカー・サルダーニャ / 藤濤2013:53)<sup>1)</sup>。それでも「等価」という概念は、いぜんとして翻訳研究において基本的かつ中心的な概念である（Panou 2013; Cuëllar 2002:63; マンデイ / 鳥飼 2018:76; ピム / 武田 2020:151)<sup>17)19)15)16)</sup>(注5)。

## VIII. 等価のレベル・タイプ

この章では、「等価」にはどのようなレベル・タイプがあるかを見る。V. で述べたように、本稿で対象にする小説の会話部分に関しては、後述する語用論レベルの等価が重要である。

### VIII- 1. Nida の分類

Eugene Nida は、翻訳研究において最も重要な人物の1人である。Nida は等価を以下の2つに分類した。

- (1)形式的等価 (formal equivalence) : 起点言語志向。形・内容ともに TT は ST と似る。
- (2)動的等価 (dynamic equivalence) : 受容者言語志向。ST と TT は、同じ効果・等価反応を持つ。可能な限り TT で ST のメッセージを伝える。Nida はこのタイプの等価を重視した (Panou 2013:2 [Nida 1964, Nida & Taber 1969] ; 長沼 2013:27-28)<sup>17)20)</sup>(注6)。

マンデイ / 鳥飼 (2018:13, 60)<sup>15)</sup>によると、Nida は当時流行していたチョムスキーによる生成文法の要素を理論ベースに組み込んだ書を、聖書翻訳者の実践手引きとして出版した。この、より「科学的な」アプローチは、いろいろな意味で、翻訳の学術研究という分野を際立たせることになった。Nida は1964年の“Towards a Science of Translating”で「科学」という用語を使用した。意味、等価、翻訳可能性の問題は1960年代の翻訳研究で絶えず繰り返されるものとなり、新しい「科学的」アプローチによって取り組まれた。

### VIII- 2. Koller の分類

Werner Koller は、Nida の翻訳の科学的アプローチの影響を受けたドイツの言語学者である。彼は言語体系上の形式的な対応関係と、実際のテキストや発話の等価関係を区別しており、そのうち翻訳研究の対象は後者の等価であるとした。これによって、等価はテキスト間関係であって、言語体系間関係ではないということが、翻訳研究では一般的な見解となった (ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:57 [Koller 1979/2004:183-184])<sup>1)</sup>(注7)。

Koller は以下のような複合的な等価の概念を示した。これは、どのように翻訳するか(どの種類の等価を目指すか)は翻訳するテキスト全体や該当部分の持つ機能によって左右されることを意味しており、基本的には、これら5つの等価の枠組みは言語が為しうることに名称を

与えたものだといえる（ピム / 武田 2020:79）<sup>16)</sup>。

- (1) denotative：テキストの言語内の内容（外延的等価）
- (2) connotative：語彙の選択（内包的等価）
- (3) text-normative：テキストのタイプ（テキスト規範的等価）
- (4) pragmatic：テキストやメッセージの受け手を重視  
（語用論的等価。Nidaの動的等価に相当）
- (5) formal：テキストの形式的・美的価値観。文体的特徴を含む。表現的価値  
（形式的等価）  
（Panou 2013:3-4; マンデイ / 鳥飼 2018:73-74）<sup>17)15)</sup>

ベイカー・サルダーニャ / 藤濤（2013:54-55）<sup>1)</sup>によると、上記(1)～(5)の等価のタイプは以下のような場合に重要視される。

- (1) ST と TT の語が現実世界にある同一物を指す場合
- (2) ST と TT の語が両言語の母語話者に同一、あるいは類似的な連想を引き起こす場合
- (3) ST と TT の語が両言語とも同じ、あるいは類似的な文脈で用いられる場合
- (4) ST と TT の語がそれぞれの読者に対して同等な効果をもつ場合
- (5) ST と TT の語が綴りや音韻の面で類似した特徴をもつ場合

### VIII- 3. Baker の分類

Mona Baker は、翻訳研究第一人者である。言語を社会文化的コンテキストにおけるコミュニケーション行為と見る談話分析と選択体系機能文法（M. A. K. Hlliday）を翻訳に応用する（マンデイ / 鳥飼 2018:19）<sup>15)</sup>。

*In Other Words: A Coursebook on Translation*<sup>21)</sup> は翻訳者に大きな影響を与えている教科書で、1992年に初版が出版され、2011年に第2版、2018年に第3版が出版された。いずれの版でも等価の種類によって章が立てられている。第3版では言語理論や社会記号論（social semiotics）の分野の発展を反映して、全面改訂された。新たに付け加えられた章では、言語的要素と視覚的要素の相互作用を扱っている。たとえば、児童文学、漫画、映画、詩や広告といったさまざまなジャンルの視角的要素である。

以下が、Bakerによる等価の分類である。

- (1)語レベル equivalence at word level
- (2)句レベル equivalence above word level
- (3)文法レベル grammatical equivalence
- (4)テキストレベル textual equivalence（主題構造・情報構造・結束性）
- (5)語用論レベル pragmatic equivalence（一貫性・含意）
- (6)記号レベル semiotic equivalence（言語・非言語的記号）[第3版で追加]

なお、Baker が語用論レベルで扱っているのは、一貫性と含意のみである。

## IX. 例

この章では、論文からの例と著者が集めた実例を挙げて、談話標識をどのように訳せば話し手の発話意図を適切に示すことができるかを考える。

## IX- 1. Hale の論文から：発話の力（発話の意図）が変わる

Hale (1999)<sup>22)</sup> からの例文を挙げる。この論文では、英語の談話標識が通訳によって被告の母語であるスペイン語に訳されているか、訳された場合は適切な訳がなされているかが調べられている。次例は、法廷における反対尋問で用いられる *well* を調査した部分である。車の保険の請求に関する反対尋問で、書類を記入した日付、記入した人物、書類を手に入れた場所に関するやり取りが続いている。スペイン語を母語とする被告は、自分より上手に英語を話せる妻が記入したが、かなり前のことなので記憶が曖昧だと主張している。原文では尋問者の英語と通訳によるスペイン語訳、被告のスペイン語と通訳による英語訳が書かれている。以下の例では、原文にあるスペイン語訳は省略している。Q の英語は尋問者によるもの、その下の [ ] 内の英語は通訳のスペイン語を英語にしたものである。A は被告のスペイン語を通訳が英語に訳したものである。INT は通訳を指す。日本語訳は著者による。

(1) Q5 : Right. So did the insurance agent come around to your house on the 23rd?

[INT : Then the insurance agent went to your place on the 23?]

(そうですか。では、保険代理店が23日に自宅にやって来たということですね?)

A5 (INT) : No. (違います)

Q6 : But you filled out the form on the 23rd.

[INT : But you filled out that form on the 23.]

(いや、でもあなたは23日に書類に記入した)

A6 (INT) : I have said I am not sure, it was so long ago.

(はっきりとは分からないと言ったでしょう。ずいぶん前のことですから)

Q7 : Right, uh, well you accept that you filled out the form on the 23rd.

[INT : Do you accept that you filled out the form on the 23?]

(そうですか。えー、もう一度お尋ねしますが、23日に書類に記入したことを認めますね)

A7 (INT) : I don't know exactly the day it was filled up.

(記入した正確な日付は分かりません)

Q8 : *Well*, where did you get the form from to fill out?

[INT : Where did you get the form to fill it?]

(ならば、どこで書類を手に入れたというのですか?) —Hale 1999:63

調査の結果、法廷における主尋問と反対尋問で用いられる *well* は反対尋問で多用され、議論・相手に対する反論・威圧を表すことが多いことが判明した。

Q5では、尋問者はそれまでの被告の話をもとめて結果を表す *so* を用いて「では、保険代理店が23日に自宅にやって来たということですね」と結論づけて確認している。被告がそれを否定し、尋問者はそれでもQ6で自分の主張をしている。それでもなお被告は同意しないので、

尋問者はQ7で同じ質問を繰り返している。Schiffrin (1985:656)<sup>23)</sup>によると、相手が同意をためらっている場合に、同じことを繰り返す際に well を用いることがある。この例では、「もう一度お尋ねしますが」と同じ質問を繰り返すことへのためらいの気持ちを表している。このような熟慮の態度を示す well は、反論や質問などの行為を遂行する場合には、相手の意見や心情を受け入れつつ、このような発話行為を遂行することへのためらいを示し、相手に対する配慮を伝えるといった対人関係の調整に貢献する（松尾・廣瀬・西川 2015:260)<sup>24)</sup>。被告はQ7にも no の答えをしたので、尋問者はフラストレーションを感じて、Q8で「ならば、あなたはどこで書類を手に入れたというのですか」と尋ねている。この well は Hale によると、“OK then, you tell me …”とパラフレイズできるということである。通訳は well を訳さなかったために、発話の命題内容は変わらなくても、語用論的な含意は変わってしまい、相手の主張に反論する度合いが低下したという。尋問者は被告人に「23日に書類を記入した」ことを認めさせられなかった。発話する際に行われる意図伝達行為である発語内行為がうまく遂行されず、その結果生じる尋問者が意図した発語媒介効力も生まれなかったのである（注8, 9）。発語内行為が首尾よく遂行されなかったということは、話し手の発話意図が伝わらなかったことを意味する。

ちなみに、通訳による談話標識の誤訳が証人の答に影響を与えた例として、now をスペイン語で so にあたる語に訳してしまった事例が挙げられている。疑問文で now を用いると、yes、no のいずれか一方の答えを期待しない中立的な質問になるのに対して、so にすると「～ということですね？」と、yes の答えを期待する質問になってしまう（Hale 1999:79)<sup>22)</sup>。

次例でも法廷における主尋問と反対尋問を題材にしており、(you) see が調査されている。

(2) Q1 : Well, you were yelling and screaming at this stage, weren't you?

[INT : You were screaming and and uh speaking in a loud voice at that moment, isn't that right?]

(で、あなたはこの時に大声をあげて叫んでいたということですね?)

A1 (INT) : Absolutely nothing no. (絶対に違います)

Q2 : See, you were yelling and screaming at the passenger of the truck.

[INT : You were yelling at the passenger in the truck.]

(いや、あなたはトラックの乗客に大声をあげて叫んでいたんだ)

A2 (INT) : I wasn't yelling to anybody, I I didn't yell at all.

(誰に対しても叫んだりしていません。私、私は叫んでなんかいません)

—Hale 1999:61

強い主張を示す (you) see は、反対尋問で多用される。この場合 (you) see は、相手が嘘をついていることを暗示し、“you listen to me, this is really what happened” 「いいですか、本当は～ということなんだ」の含意があるという（Hale 1999:70)<sup>22)</sup>。

上例では、Q1の well では尋問者の威圧や反論の態度が示され、それに対して証人はA1できっぱりと否定している。Q1が純粋な疑問ではなく相手の同意を誘う付加疑問文になっていることに注意する必要がある。A1の否定を受けて、Q2で尋問者はQ1と同じ内容を see の後で平叙文で提示して、「いや、あなたはトラックの乗客に大声をあげて叫んでいたんだ」と非難の気持ちを込めて強く主張している。しかし、通訳は well も (you) see もスペイン語に訳さなかつ

た。そうすると主張の強さが弱まり、非難ではなく単なる陳述になってしまい、尋問者が意図した発話の力（発話の意図）が伝達されていない。ちなみに、通訳は談話標識全体の約70%を訳さなかった。

通訳が談話標識を省く理由は、以下のとおりである（Halle 1999:80）<sup>22)</sup>。

- (1)伝えるべきメッセージにとって、談話標識は余分なものと判断する。
- (2)同じ発話内の力を持つであろう意味的に等価な表現がない。

その結果、次のような事態が生じる可能性がある。

- (1)時に、談話標識の誤訳が発話の含意を変えてしまう。
- (2)発話の発話内の力を変えてしまう。
- (3)相手の反応を変えてしまう。

## IX- 2. again : 注意喚起し大切なことを述べる

次例は、私（＝脚本家）と元刑事で探偵の会話である。Richard はワインボトルで殴られ、砕けたボトルで喉を切られて死亡した。犯人が判明したことに関するやり取りである。

- (3) “Just tell me,” I said. “Colin killed Richard Pryce. How did you work it out?” He looked at me quizzically, as if he didn't quite understand me. Then he told me what I wanted to hear. “I said to you that I'd narrowed it down to one of two people,” he began. [...] “Richard invited him (=Colin) in. He could probably see that Colin was upset, although he had no idea what had brought him to the house. He got them both a drink. You remember what we saw on the table in his study?” “Two cans of Coke.” “Exactly. There was alcohol in the house but Richard didn't drink it—and nor did his visitor. That's one of the reasons I figured it wasn't Davina. She drinks like a fish. *Again*, who drinks Coca-Cola at eight o'clock in the evening?” “A child.”—Horowitz, *Sentence* (「とにかく、話してくれ」と私は言った。「コリンがリチャード・プライスを殺したのだ。きみは、どうやってそのことを解明したんだ？」彼はいぶかしげに私を見た。まるで私が何を言っているか理解できないかのようだった。そして私が聞きたいことを話してくれた。「容疑者ふたり(Davina かColin) のどちらか、というところまで絞り込んだとあなたに話したよな。」と、彼は話し始めた。[...]「リチャードはコリンを招き入れた。彼がひどく動揺しているのが分かったんだろうな、どんな理由で訪ねて来たかはまったく分からなかっただろうが。2人分の飲み物を出した。書斎のテーブルに何があったか、憶えてるだろう?」「コーラの缶が2本あったな」「そのとおり。家には酒もあったが、リチャードは飲まない—そして、訪問客も。これがダヴィーナを容疑者から外した理由のひとつなんだ。あの女は大酒飲みだからな。あらためて聞くが、夜の8時にコーラを飲む客とは?」「子どもだな」)

引用中の省略部で、話し手である探偵は Colin が殺人犯だという根拠をいくつか並べて謎解きを進め、最後に相手に問いを投げかけている。「テーブルの上に何があったか」という探偵の問い、それに対する脚本家の答、続いての問いである「夜の8時にコーラを飲むのは誰か」の前に again が用いられている。クライマックスとなる最後の問いの前で again を用いること

によって、相手の注意を引きつけ、次に述べる情報は重要なことだと合図し、その情報を伝えたいという話し手の発話意図を示しているのである。again がなければ、単に根拠を並べるに過ぎない感じがする。この again には念押し・確認の機能があり、疑問文で用いられると、答が質問者と返答者双方が分かっている場合が多い。平叙文では、話し手の主張が強められる。

### IX- 3. by the way : さりげなさを演出しつつ重要な情報を伝える

次例は、Emily と Andy の会話である。Max は Andy の夫、Miles は Emily の夫で、Max と Miles は友人同士である。Andy は、夫が結婚前の旅行で元彼女と会って関係を持ったのではと疑い、夫から性感染症を移されたかもしれないと不安に思い検査を受けた。夫には浮気についてすでに尋ねている。

- (4) Emily knocked on Andy's office door and walked in without waiting for a response. "Hey, you look horrible. Are you still sick? More to the point, did you talk to Max?" "Yes on both counts," Andy plucked a Hershey's Kiss from the glass bowl she kept on her desk before pushing the bowl toward Emily. Emily sighed, unwrapped one, and popped it in her mouth. "So, what did he say? I asked Miles, *by the way*, and he swears there were zero girls hanging out with them. And I believe him. [...]" —Weisberger, *Prada* (エミリがオフィスのドアをノックして、返事も待たずに入ってきた。「ねえ、顔色良くないわよ。まだ気分が悪いの？もっと大事なことがあるんだけど、マックスに話してみた？」「ええ。両方ともイエスよ」アンディはデスクに置いてあるガラスのボウルからハーシーのキスチョコを1つつまんで、ボウルをエミリの方へ押し出した。エミリはため息をついて包装紙をむいて、口に放り込んだ。「で、彼はなんて言ってた？ちょっとマイルズに訊いてみたんだけど、(旅行中に)女の子と遊ぶことは断じてなかったって。で、私は彼の主張を信じるわ。[...]」)

by the way は、基本的には本題から外れた話題を余談的に、思いつきで導入する機能を持つ(西川 2011:73)<sup>25)</sup>。ここでは、I asked Miles という文の文尾で by the way が用いられている。by the way は文尾で追加陳述的に用いられて、それが主たる話題でないことを示すことがある(松尾・廣瀬・西川 2015:140)<sup>24)</sup>。Emily は Andy に Max の答えの内容を尋ねたが、Andy が返答を待たずに、Max と同行した Miles に尋ねた答を提示している。ここで by the way を用いることで、「ちょっと聞いてみたんだけど」と何かのついでに尋ねたというニュアンスを意図的に伝えて、その後で重要な情報を提示している。by the way がないと、話し手はあらかじめ Miles に話を聞こうと考えていたような感じがする。

次例は、スペイン海軍退役提督の Ávila と、彼のリハビリトレーナーの Marco の会話である。

- (5) Ávila eyed the young man's Jesus shirt. "But it looks like you're still..." "Oh yea, I'm *definitely* still a Christian. More devout than ever. I was fortunate to find my mission—helping victims of God's enemies." "A noble cause," Ávila said enviously, feeling his own life was purposeless without his family or the navy. "A great man helped bring me back to God," Marco continued. "That man, *by the way*, was the pope. I've met him personally many times." "I'm sorry...the pope?" —Brown, *Origin* (アビラはイエスの顔がプリントされた若者(=マルコ)のTシャツに目をやった。「しかし、きみは今でも...」「ええ、そうです。今でも間違いなくキリスト教信者ですよ。以前

より信仰が厚くなったぐらいです。幸運にも、自分の使命を見つけたんです—神の敵に襲われた被害者を助ける使命をね」「崇高な動機だな」アビラはうらやましげに言った。家族を失い、海軍を去り、自分の人生には何の意味もないと感じていた。「ある偉大な人がぼくを神のもとへ連れ戻してくれたのです」マルコは続けた。「その人は、ちなみに誰かというと、教皇です。個人的に何度も会いました」「何だって…教皇だと？」)

ここでは、by the way は文中で用いられている。文中で用いることで、後続の要素の the pope に焦点を当てている。by the way でさりげなさを装いつつ、相手の注意を引いて、実は重要な情報を提示して、それを伝えたいという話し手の意図が示される。by the way がないと、話の流れに乗ってあっさり重要な情報を提示する感じがする。

#### IX- 4. actually : 本心を語る

次例は、アメリカ大統領が辞任を申し出た副大統領に後任に誰を選ぶべきか、副大統領自身に意見を求める場面である。

(6) “Whom should I appoint?” I ask. She takes a deep breath. “There are a few people who come to mind. But one above everyone else. It pains me to say it, *actually*. It pains me a lot. But if I were you, Mr. President, and if I could pick anyone … I’d choose Carolyn Brock.”—Clinton and Patterson, *President* (「誰を選ぶべきなんだろうか」私 (= 大統領) は尋ねる。彼女は深く息をつく。「頭に浮かぶ人が数人います。でも 1 人が他の誰よりも上位にいます。その人の名前を言うのは辛いのです、正直に申し上げて。とても辛い。しかし私があるあなたの立場にいたら、大統領、そして誰を選んでもいいのなら…キャロリン・ブロックを選びます」)

Brock は大統領首席補佐官で大統領に信頼されていたにもかかわらず、あることで大統領を裏切った。この actually は文尾で用いられていて、「本当に」の意で主文の主張を強めている。確かに「辛い」という主張を強めてはいる。しかし、「正直に申し上げると」と訳した方が、Brock の名前が挙がることに対する大統領の気持ちに配慮する副大統領の極めて残念に思う気持ちが表される。

次例は、収監中の凶悪な殺人犯の元精神科医 Lecter 博士と FBI の訓練生 Starling の会話である。Starling は、ある殺人事件の捜査に関するアドバイスを求めて、博士に面会に来た。博士はインタビューに訓練生を送って来たことを不満に思っている。

(7) “I’m still in training at the Academy, yes,” Starling said, “but we’re not discussing the FBI—we’re talking about psychology. Can you decide for yourself if I’m qualified in what we talk about?” “Ummmm,” Dr Lecter said. “*Actually* … that’s rather slippery of you. …”—Harris, *Lambs* (「私はまだアカデミーで訓練中です、ええ」とスターリングが言った。「でも、私たちはFBIのことを話し合っているではありません。心理学について話しているのです。私たちが話すことについて、私がある資格があるかどうか、あなたご自身で判断していただけますか」「うーむ」レクター博士は言った。「正直に言って…きみのやり方はかなりずるいな…」)

博士の“Ummm”ということばや actually の後にポーズがあることを考えると、博士がしぶし

ぶインタビューを了承していることや、不本意ながらも Starling のことを認める気持ちを表すには、「実は」よりも「正直に言って」の方が適切である。

ここに挙げた例の *actually* は、話し手がどのような立場から発話しているかという「話し手のスタンス」を示す *honestly* に近い機能を持つと考えられる。*honestly* は、不本意な気持ちを察して自分の主張を理解してほしいと相手に訴えかける意図を示す（廣瀬・松尾・西川 2022:154）<sup>2)</sup>。*actually* によって話し手は自分の主張を強めている。その主張の内容が話し手にとって不本意なこと、好ましくないことである場合には、話し手の感情が前面に出て、*honestly* に近くなる。ただし(6)のように、*actually* には *honestly* にはない相手の気持ちに配慮する丁寧表現としての働きが見られることがある。このような機能を持つ *actually* を用いることで、話し手は本心を、場合によっては思わず語っているのである。

#### IX- 5. *of course* : 何が「もちろん」なのか。文脈の読み取り

次例は、2人の作家 Mercer と Myra の会話である。Mercer は Myra の自宅を訪ねる約束をしている。

(8) She tapped on the door and a pack of yappy dogs erupted on the other side. A beast of a woman yanked open the door, thrust out a hand, and said, "I'm Myra. Come in. Don't mind the dogs. Nobody bites around here but me." "I'm Mercer," she said, shaking hands. "*Of course* you are. Come in."—Grisham, *Camino* (彼女がノッカーでドアを叩くと、犬の群れが扉の向こうでけたたましく吠え立てた。獣のような女がドアを乱暴に引っ張って開け、手を突き出して言った。「マイラよ。中に入って。犬のことは気にしないで。このあたりには私以外に噛みつくものはいないわ」「マーサです」と彼女は手を握りながら言った。「待ってたわ。さあ、どうぞ」)

*of course* は「もちろん、当たり前のことだが」の意で、今から述べる発話内容や意図に関して、当然のこと、明らかな事実であることを示す（松尾・廣瀬・西川 2015:156）<sup>24)</sup>。文字通りに「もちろんあなた（がマーサ）よね」とすると、たとえば、その場に Mercer 以外に何人か人がいて、その中の1人が Mercer だと名乗り、あらかじめ彼女の容姿を知っている Myra が相手の姿を見て Mercer だと確認したような感じになる。以前から訪問の約束をしていたという文脈からすると、相手が Mercer であることは当然の事実であることから、「彼女を待っていた」という話し手の意図を伝えている。また *of course* によって、相手の発言を受け止めて、それに応答して話を進めるといった対人関係の調整に関わる機能もある。

#### X. おわりに：再び翻訳とは—談話標識の視点から

小説の会話部分で多用される談話標識の翻訳を試みると、VIII- 2. で挙げた翻訳研究の対象は、言語体系上の形式的な対応関係ではなく、実際のテキストや発話の等価関係であるという Koller の主張が妥当だと感じる。実際の言語使用の場面である文脈を読み取らなければ、談話標識を適切に訳すことはできない。実際の言語運用における意味を扱うのが語用論で、談話標識はまさしく、語用論的要素である。

翻訳によって伝えられるのは、ST の情報内容だけではない。話し手の発話意図も適切に伝えられなければならない。談話標識は実際に用いられた文脈との関連で意味機能が決まる。この意味機能とは話し手の発話意図を示すことであり、談話標識は話し手の発話意図を適切に伝

える手がかりとなる。SL の談話標識すべてを TL に置き換えることは不可能ではあるが、小説の会話部分で用いられる談話標識の機能を理解することで、登場人物のやり取りの機微を捉えることは可能であると考え（注10）。

## 注

1. 談話標識の意味的な特徴の1つとして、語彙の意味が強く感じられるものから薄れたものまで段階性が見られる場合がある。たとえば、話し手の態度・感情表明の機能を持つ frankly（正直に言って）は、語彙的な意味が明確に感じられる。so では、原義である論理的・推論結果を表す機能がある。会話の締めくくりで用いられると、原義がいくぶん感じられて、一連のできごとの最終的な結果を表す機能を持つ。一方、話題転換の機能では、so の結果の意味は薄れている。したがって、談話標識は意味論と語用論両方に関わるといえる。
2. Jakobson, R., "On Linguistic Aspects of Translation", In R. Brower(ed.), *On Translation*. Harvard University Press, 1959. 232-239.
3. Jakobson の記述では、言語間翻訳は「ある言語のメッセージを別の言語の個々のコード・ユニットで置き換えるのではなく、メッセージ全体で置き換える」ことである（マンデイ / 鳥飼 2018:58)<sup>15)</sup>。この「メッセージ全体」は示唆に富んだ概念である。
4. 目標言語志向である同化的翻訳（domesticating translation）と、起点言語志向である異化的翻訳（foreignizing translation）という分類もある（長沼 2013:29<sup>20)</sup> [Venuti 1995/2008]）。これらはそれぞれ、潜在的翻訳と顕在的翻訳にほぼ相当する。Venuti は、Venuti, L., *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. Routledge. 1995/2008.
5. 等価理論に批判もある。スコポス理論では、翻訳を目的を持った異文化間の行為と捉える。スコポスという語はギリシャ語に由来し、「翻訳の目的」を表す専門用語である。翻訳の焦点を、ST を再現することから、異文化間の相互作用のための TT 産出に固有の問題へと移した。TT の形式は、それが果たすべき目的によって決定される。翻訳を決定するのは、原文でもなければ原著者の意図でもなく、翻訳の目的である。この理論は、等価をベースとした従来の翻訳観を根底から覆すパラダイムの転換だと言える（ベイカー・サルダーニャ / 藤濤 2013:87, 90, 98)<sup>1)</sup>。
6. Nida, E. A., *Towards a Science of Translating*. E. J. Brill. 1964.  
Nida, E. A. and C. Taber, *The Theory and Practice of Translation*. E. J. Brill. 1969
7. Koller, W., *Einführung in die Übersetzungswissenschaft*. Quelle und Meyer. 1979/2004.
8. 語用論では、発話の意味は文脈との関連で生じると考えるが、その際に重要なのは、J. L. Austin と J. R. Searle によって展開を見た発話行為の理論（speech-act theory）である。話し手が発話する際には、単に語句や文を発するだけではなく、さまざまな行為を遂行しているとする。発話行為を行う際に遂行される行為は、以下のとおりである。
  - (1)発話行為（locutionary act）：特定の意味を持った特定の文・句・語を言うという行為
  - (2)発語内行為 / 効力（illocutionary act / effect）：発語行為を介して遂行される約束、要求、言明、警告のような話し手の意図を伝達する行為
  - (3)発語媒介行為 / 効力（perlocutionary act / effect）：発話の結果、それが聞き手に及ぼす行為。たとえば、聞き手が安心する、喜ぶなど。

（林 2008:4; 今井 2014:275-276)<sup>26) 27)</sup>

9. well に関して Aijmer (2013)<sup>28)</sup> では以下のように述べられている。当該のやり取りが agenda、あるいはルーティーンに沿ったものであることを示すために、well が用いられる場合がある。次例は、医師Aと患者Bのやり取りであるが、well によって双方が自らの役割を認識していることを相手に合図して、会話がお決まりの手順で進んでいることが示される。

A : A sore throat. Well how old were you when the tonsils were taken out

B : *Well* I had them taken out, in January

A : This year

B : Yeah—Aijmer, 2013: 35

well には会話の進行の過程で、相手の発話を受けて話を続ける同調機能があり、対人関係調整に寄与することがある。この例はそれに当たる可能性がある。このような well を日本語に訳すことは、かなり困難だと思われる。

10. 小説の会話では、口ごもり、非標準的な言葉遣いや発音を反映した綴り、地域方言や社会方言も現れる。これらの中には、Koller の言う connotative equivalence (暗示的等価) に関わる語彙の選択レベルと関係する問題がある。Baker (2018:19-24)<sup>21)</sup> では、単語レベルで等価が見いだせない場合として、その語が SL の文化に特有な要素である、その語が表す SL の概念が TL で語彙化されない、SL と TL では表出的な意味が異なる場合など合計11のタイプが挙げられている。

また、小説には会話部分のほかに地の文である語りの部分があるが、Hasegawa (2012:107-108)<sup>29)</sup> では narrative discourse に関して、英語では通例、一貫して過去時制が用いられるが、日本語では過去時制と非過去時制の両方が用いられるとある。これは、Baker の言う文法レベルでの等価と考えることができる。

語用論的等価は小説の会話部分以外にも見られる。次は日本語を英語に訳す場合の例であるが、Hasegawa (2012:97)<sup>29)</sup> によると、商品のパッケージの写真に関して、「写真はイメージです」を The picture is an image. と訳すと、単なる同義語反復になってしまう。ここで伝えたいのは、パッケージの写真は実際の中身とは異なるということなので、意図した発話行為をより正確に表すなら、Serving suggestion (盛りつけ例) ぐらいにするのが適切である。

## 参考文献

- 1) バイカー M., サルダーニャ G. (編), 藤濤文子(監修・編訳), 『翻訳研究のキーワード』 研究社, 2013. [Baker, M. and G. Saldanha, *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. (2nd edition). Routledge, 2012]
- 2) 廣瀬浩三, 松尾文子, 西川真由美, 『英語談話標識の姿』 ひつじ書房, 2022.
- 3) Fraser, B., "Pragmatic Competence: The Case of Hedging." In G. Kaltenböck, W. Mihatsch and S. Schneider (eds.), *New Approach to Hedging*. Emerald Group Publishing, 2010. 15-34.
- 4) Brinton, L. J., *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. De Gruyter Mouton, 1996.
- 5) Brinton, J. L., "Discourse Markers." In A. H. Jucker and I. Taavitsainen (eds.), *Historical Pragmatics*. De Gruyter Mouton, 2010. 285-314.
- 6) Johansson, S., "How well can *well* be translated? : On the English Discourse particles *well* and

- its correspondence in Norwegian and German.” In K. Aijmer and A.-M. Simon-Vandenberg (eds.), *Pragmatic Markers in Contrast*. Elsevier, 2006. 115-136.
- 7) Aijmer, K., A. Foolen and A.-M. Simon-Vandenberg, “Pragmatic markers in translation: a methodological proposal.” In K. Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles*. Elsevier, 2006. 101-114.
  - 8) Onodera, N. O., “Diachronic Analysis of Japanese Discourse Markers.” In A.H. Jucker (ed.), *Historical Pragmatics: a pragmatic developments in the history of English*. John Benjamins, 1995. 393-437.
  - 9) Onodera, N. O., “Development of demo type connectives and *na* elements: Two extremes of Japanese discourse markers.” *Journal of Historical Pragmatics*. 2000. 1(1), 27-55.
  - 10) Onodera, N. O., “Interplay of (inter)subjectivity and social norm.” *Journal of Historical Pragmatics*. 2007. 8(2), 239-267.
  - 11) Traugott, E. C., “From subjectification to intersubjectification.” In R. Hickey (ed.), *Motives for Language Change*. Cambridge University Press, 2003. 124-139.
  - 12) López-Couso, M. J., “Subjectification and intersubjectification.” In A. H. Jucker and I. Taavitsainen (eds.), *Historical Pragmatics*. De Gruyter Mouton, 2010. 127-163.
  - 13) 山本史郎, 『翻訳の授業：東京大学最終講義』朝日出版社, 2020.
  - 14) House, J., *Translation*. Oxford University Press, 2009.
  - 15) マンデイ J. (編), 鳥飼玖美子(監訳), 『翻訳学入門』みすず書房, 2018. [Munday, J., *Introducing Translation Studies*. (2nd edition). Routledge, 2008]
  - 16) ピム A. (著), 武田珂代子(訳), 『翻訳理論の探求』みすず書房, 2020. [Pym, A., *Exploring Translation Theories*. Routledge, 2010]
  - 17) Panou, D., “Equivalence in Translation Theories: A Critical Evaluation.” *Theory and Practice in Language Studies*. 2013. 3(1), 1-6.
  - 18) Koller, W., “The Concept of Equivalence and the Object of Translation Studies.” *Target*. 1995. 7(2), 191-222.
  - 19) Cuéllar, S. B., “Equivalence Revisited: A Key Concept in Modern Translation Theory.” *Forma y función*. 2002. 15, 60-88.
  - 20) 長沼美智子, 「翻訳研究における『等価』言説」『通訳翻訳研究』日本通訳翻訳学会, 2013. 13, 25-41.
  - 21) Baker, M., *In Other Words: A Coursebook on Translation*. (3rd edition). Routledge, 2018.
  - 22) Hale, S., “Interpreters' treatment of discourse markers in courtroom questions.” *Forensic Linguistics*. 1999. 6(1), 57-82.
  - 23) Schiffrin, D., “Conversational Coherence: The Role of *well*.” *Language*. 1985. 61(3), 640-667.
  - 24) 松尾文子, 廣瀬浩三, 西川眞由美, 『英語談話標識用法辞典：43の基本ディスコース・マーカ―』研究社, 2015.
  - 25) 西川眞由美, 「話題転換を表す談話標識」 *Setsunan Journal of English Education*. 2011. 5, 69-90.
  - 26) 林宅男(編著), 『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社, 2008.
  - 27) 今井邦彦(監訳), 『語用論キーターム事典』開拓社, 2014.
  - 28) Aijmer, K., *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh

University Press, 2013.

29) Hasegawa, Y., *The Routledge Course in Japanese Translation*. Routledge, 2012.

**引用作品** ([ ]内は本文中のタイトル表記)

Brown, D., *Origin*. 2017. [*Origin*]

Clinton, B. and J. Patterson, *The President Is Missing*. 2018. [*President*]

Grisham, J., *Camino Island*. 2019. [*Camino*]

Harris, T., *The Silence of the Lambs*. 1988. [*Lambs*]

Horowitz, A., *The Sentence is Death*. 2018. [*Sentence*]

Weisberger, L., *Revenge Wears Prada*. 2013. [*Prada*]